

# 『源氏物語』 橋姫卷の垣間見を読む

吉 海 直 人

【要旨】 垣間見の再検討の一環として、橋姫卷の垣間見について改めて考察してみた。その結果、暁方という特殊な時間帯で

あること、視覚的に有明の月と霧・雲が動的に作用していること、聴覚的に琴の音が薫を垣間見へと誘っていること、姫君達の会話が薫の耳に聞こえていること、嗅覚的に薫の移り香が姫君達のところまで香っていることが明らかになった。

【キーワード】 源氏物語、垣間見、橋姫卷

—

昨年、『源氏物語』における「垣間見」の重要性を再提起するために、『垣間見る源氏物語』<sup>1)</sup>を出版したが、橋姫卷の垣間

見場面の考察が不十分だったことに気が付いた。そこで反省の意味を込めて改めて分析・検討してみたい。

最近、『源氏物語』の研究に源氏絵からのアプローチが盛んに行われている。源氏絵が『源氏物語』の普及に大きな役割を果たしていることは間違いないが、だからといって描かれているものがすべてプラスの資料だとは限らない。源氏絵には絵師独自の解釈が反映している場合も否めないのだから、マイナス面もしっかり把握した上でないと却って混乱が生じかねないのではないだろうか。

そのこと的一端は、近世のいわゆる源氏物語画帖の若紫巻において、逃げてそこにいないはずの雀が画中に描かれていることが如実に示している。これを過去と現在の二つの時間が同一

画面に書き込まれているとプラスに解釈するのも結構だが、少なくとも源氏が雀を目にしているのは明らかであるから、蛇足の感は否めない。しかもそれが強調されたために、絵入版本（ダイジェスト版）の挿絵や「源氏香之図」に継承されてしまい、ついには不在の雀が、若紫巻を代表するシンボルにまで昇華してしまうのだから始末が悪い。そうなると思源氏物語そのものが歪められることになるからである。

国宝の「源氏物語絵巻」でさえも同様のことが言える。近年、現代の科学技術を総動員しての復元プロジェクトが行われ、剥落した色や模様が鮮やかに蘇った。その復元作業を通して、新たな発見も相次いだ。その一つは、人物の顔や手から硫化水銀（有害物質）反応が出たことである。もともとの顔は鉛白という白粉で塗られていたはずなので、硫化水銀の反応が出ることで考えられないことであった。そのことから顔の鉛白が剥落してしまっただけで、何度か絵巻の補修が行われた際、硫化水銀を含む白粉が使用されたことが判明した。橋姫巻に描かれた人物の顔にも、水銀入りの白粉が塗られているとのことである。これは大きな発見であった。

ただし忘れてならないのは、どんなにすぐれた科学をもって

しても、全てが解明されたわけではないということである。プラスの効果ばかりを強調するのは、学問として正しいことではあるまい。

## 二

さて本題の垣間見に入ろう。薫が宇治八の宮の邸に近づくと、近くなるほどに、その琴とも聞きわかれぬ物の音ども、いとすこげに聞こゆ。（橋姫巻137頁）

と琴の音が遠くから聞こえてきた。「物の音ども」とあるので複数の音、つまり合奏であることがわかる。「すこげに」とは形容詞「すこし」（今の「すこい」）に「げ」が結合した形容動詞であるが、『源氏物語』以外にほとんど用例が見られない。この「すこげ」には、プラスとマイナス両方の意味がある。「物寂しい・不気味だ」というマイナスの意味と、「趣がある」というプラスの意味である。新編全集では「ぞ」とするほどもの寂しい感じ」（137頁）と注を付けてある。やや曖昧だが、恐らくマイナスではなくプラスの音としていたのであろう。

ここではまだ視覚が機能しない距離であるから、遠くからかすかに聞こえてきた琴の音が、聴覚によって薫を引き寄せる効

果を持っていると読める。その時点ではどの楽器か判別できなかったようだが、「ついでなくて、親王の御琴の音の名高きもえ聞かぬぞかし、よきをりなるべし、と思ひつつ入りたまへば、琵琶の音の響きなりけり」(同頁) と思って邸内に入ったところ、琵琶と箏の琴の音であることが聞き分けられている。聴覚というか音楽的な素養も重要で、その能力が高ければ、楽器の違いや演奏の上手い下手だけでなく、曲名はもとより誰が演奏しているかまでわかることがある。この時の薫はまだ情報不足で、つまり姉妹の演奏を聴いたことがなかったので、そこまではわかっていない。ただし複数の楽器を聞き分けたのであるから、八の宮以外の奏者つまり姫君との合奏であることも察せられたはずである。

邸に到着すると宿直の男が応対し、八の宮が留守だということを知らされる。これによって薫は、さきほど聞いた琴の音が姫君達の演奏だったことを確認した。そこでチャンスとばかり、姫君達の演奏しているところを垣間見ようと、「あなたの御前は竹の透垣しこめて、みな隔てことなる」(139頁) ところに案内してもらった。戸をすこし押し開けて垣間見た薫の目には、次のような光景が見えている。

『源氏物語』橋姫巻の垣間見を読む

月をかきほどに霧りわたれるをながめて、簾を短く捲き上げて人々ゐたり。簀子に、いと寒げに、身細く萎ええばめる童一人、同じさまなる大人などゐたり。(同頁)

従来の垣間見は視覚重視であった。まず「月」に注目していただきたい。夜であるから月がなければ暗くて何も見えない。ただし霧が出ていて月が見えるのだから、これこそ京都らしい気象といえる。それにしても月明かりでの垣間見であるから、そんなにはつきり見えるはずはなからう。ところが国宝絵巻はまるでライトアップされているかのように明るく描かれているではないか。もちろん薄暗くては絵として機能しないからだろうが、それにしても現実とはかなり乖離していることを了解しておきたい。

ところで薫が宇治を尋ねたのは、「秋の末つ方」(135頁) とあるから、九月下旬ということになる。また「有明の月のまだ夜深くさし出づるほどに出で立ちて」(同頁) ともあった。「夜深くさし出づる」のは有明の月であるから、決してまん丸ではなくむしる半月に近いのではないだろうか。それにもかかわらず国宝絵巻には丸い月が描かれているので、これも本文の忠実な再現ではないことが理解される。

もう一点は垣間見の時間である。従来、この垣間見が何時頃行われたかということには関心がなかったのではないだろうか。単に夜というだけで、その時間について何も考えてこなかった。しかし薫は京都を夜深く出立したのであるから、馬で宇治に到着するのに数時間を要する。どうやらこの垣間見はかなり夜遅い時間、というよりも夜が明ける少し前の暗い時間に行われたようである。

この垣間見の後、薫は弁の尼という老女房と応対するが、その時は「曙のやうやうものの色分かるる」(144頁)と記されている。その後、宇治を去るに際して「あさぼらけ」(148頁)の和歌を詠じているが、「明うなりゆけば、さすがに直ひたももて面なる心地して」(149頁)とあるので、それでもまだ完全には明るくならないなかったことがわかる。

京都に戻った薫は、匂宮に宇治の一件を報告するが、そこにも「見し暁のありさま」(153頁)とあった。この垣間見は暁に行われていたのであり、それから「暁」↓「曙」↓「あさぼらけ」と時間が進行していることになる。姫君達は暁方に合奏していたのである。だからこそ誰も聞く人はいないだろうと油断したのだろう。橋姫巻の垣間見は尋常でない時間に行われたことを

理解しておきたい。

### 三

次に本文に「簾を短く捲き上げて」とあることに注目したい。もちろん前提として、格子もあげ(上げ・開け)られていた。では具体的に簾はどこまで「短く」巻けばいいのだろうか。どうやらこの解釈が揺れていて、中には上の方まで巻きあげた結果簾が短くなっていると解釈しているものもある。何冊かの本を参照すると、今でも解釈が別れたままになっている。実はこの「短い」は、現代の意味とは違っているのである。

それを考えるためには、「高い」の反対語を明確にしておく必要がある。一般に「高い」の反対は「低い」だが、なんと『源氏物語』の時代には、「低い」(ひきし)という言葉はまだ使われていなかった。その代わりに用いられていたのが、この「短い」なのである。椎本巻に「高きも短きも、几帳を二間の簾に押し寄せて」(217頁)とあるのが参考になる。つまりこれは「高い」の反対語だから、「簾を低く巻き上げて」という意味になる。要するに簾を上まで巻き上げず、下の低いところまで止めているのである。それで月が見えるのであれば、月はまだ

低い位置にあったことになる。時間的には沈む月ではなく昇る月であろう。

さて垣間見ている薫の目は、約束事として外側から内側へと向けられる。最初は簀子にいる二人、童は女童のことで大人は若人よりは年長の女房のことである。「萎えばめる」とは糊のさいていない衣装のことである。若紫巻の紫の上も「萎えたる着て」(206頁)とあった。これは童だから動きやすい衣装になつていのかかもしれないが、一般には経済的に不如意なのでよれよれの衣装を着ていると考えられている。それが「いと寒げに」とも呼応しているのである。実は八の宮自身も「直衣の萎えばめるを着たまひて」(123頁)とあったし、姫君の衣装も「御衣ども萎えばみて」いた。これは女房達の衣装だけの問題ではなかったのだ。だからこそ奥に引込込む時も「衣の音もせすいとなよやかに」(140頁)なのである。

それに続いて、

内なる人、一人は柱にすこし隠れて、琵琶の前に置きて、撥を手まさぐりにしつゝるたるに、雲隠れたりつる月のにはかにいと明くさし出でたれば、「扇ならで、これしても月はまねきつべかりけり」とて、さしのぞきたる顔、いみ

じくらうたげにほひやかなるべし。添ひ臥したる人は、琴の上にかたぶきかかりて、「入る日をかへす撥こそありけれ、さま異にも思ひおよびたまふ御心かな」とて、うち笑ひたるけはひ、いますこし重りかによしづきたり。

(140頁)

とある。「内なる人」とは簾の内側、つまり廂の間にいる大君と中の君のことである。外から内へと説明するのが原則であり、ここでは簾を境として外(簀子)と内(廂の間)が区切られていることになる。また前に書かれる人より後の人の方が身分が高く、かつ主役のようである。加えて琴を弾かない女房達と琴を弾く姫君達とに区別されているようでもある。本来ならば着ている衣装にも言及されるのだが、ここでは暗くてよく見えぬのか、省略されている。文末に草子地風の「べし」とか「けはひ」とあるので、必ずしも薫の目にはっきり見えているわけではなかった(読者の方が鮮明に見えている)。

ここでは姉妹が月を見るために簾を上げ、端近に出ていることと薫の垣間見も可能となった。さらに隠れていた月が出てきたので、その光で薫にも少しは見えたのだらう。国宝絵巻は静止画面だが、物語は月と霧・雲のダイナミックな動きによって

揺れていることを強調しておきたい。<sup>⑤</sup>

同時に姉妹を垣間見するというパターンは、間違いなく『伊勢物語』初段の昔男が「女はらから」を垣間見る場面を踏まえていると考えられる。『伊勢物語』の場合は姉妹というだけで、二人の違いはまったく問題にされていないので、どっちがどっちかはわからなかった。いわば姉妹は同化していたのである。

橋姫巻でも、薫がどちらの女性に興味を抱いていたのか明確ではないし、大君と中の君の区別がきちんとできていたとも思えない。そのためか姉妹の持っている楽器について、古くから二説が対立している。絵巻の解説などでは大君が琵琶、中の君が箏の琴になっている場合が多い。それは本文に「姫君に琵琶、若君に箏の琴」(124頁)とあることを根拠としている。ところがその後の研究の進展によって、現在ではほぼ中の君が琵琶、大君が箏の琴とされるようになっていく。その方が姉妹の性格に一致するからである。<sup>⑥</sup>

また描かれる順番に意味があるとすれば、最後に描かれている箏の琴を弾く人がもっとも重要人物ということになる。そのことは薫の耳に「箏の琴、あはれになまめいたる声して」(137頁)と聞こえていたことから察せられる。「いみじうらうた

げ」とは対照的な「いますこし重りかによしづきたり」という形容は、姉の大君にこそふさわしかろう。そうなると箏の琴は、やはり大君でなければならぬことになる。まだ自覚していないのかもしれないが、薫は箏の琴を弾いた大君に既に惹かれていたと読めるわけである。一方の中の君は「撥を手まさぐり」にしていたが、この「手まさぐり」は普通「もてあそぶ」とか「いじる」とか訳されている。しかし『源氏物語』においては楽器を爪弾く意味で用いられることが多いので、<sup>⑦</sup>ここも演奏の延長線上で考えておきたい(楽器を取り替えた直後という読みも可能ではある)。

薫は琴の音によって姫君の元へ導かれたわけだが、垣間見場面では既に演奏は終わっていた。代わって薫の耳には姫君達の会話が聞こえている。大君の「うち笑ひたる」声も聞こえているのである。この姉妹の「はかなきことをうちとけのたまひかはしたる」(140頁)様子を立ち聞いた薫は、姫君に惹きつけられることで、道心と恋の宇治十帖が展開することになる。かつて源氏も空蟬と軒端の荻の囲碁場面を垣間見ていたが、その際も「かくうちとけたる人のありさま」とあった。どうも垣間見の約束事として、見る方はうちとけた姿を見ていると信じ

ているようである。この場面がそうだというわけではないが、そこに思い込み（誤解）が存する可能性も忘れてはなるまい。

垣間見のもう一つの約束事は、必ずしもはっきりは見えていないということである。これも霧がかかっているし、月が出たり出なかったりしているのだから、「霧の深ければ、さやかに見ゆべくもあらず。また、月さし出でなんと思すほどに」（140頁）という状態なのである。もちろん月は意識的に出たり出なかつたりしているわけではないが、それがいかにも薫の好奇心をおおる（翻弄する）ような効果を出していることになる。特に中の君など「にはかにいと明くさし出でた」月をさしのぞいたことで、薫に顔を見られている。

なお宇治は霧深いところであった。霧の用例は『源氏物語』の中に全部で六九例あるが、橋姫巻にはそのうちの一例も用いられている（最多は夕霧巻の一四例）。そこで上坂信男氏は「小野の霧・宇治の霧」という論文で、橋姫巻は秋を基調に描かれており、その背景に霧がかかっている。その霧は単なる気象現象にとどまらず、そこに住む人の憂鬱な「心象風景」であり、また未来の暗示でもあると説かれている。<sup>⑨</sup>この場合の雲（霧）は、垣間見の効果としても機能していると言えよう。

#### 四

垣間見の要素として、視角・聴覚だけでなく嗅覚の重要性にも言及しておきたい。宇治に薫が尋ねてきていることがわかった後に、

かく見えやしぬらんとは思しも寄らで、うちとけたりつる  
ことどもを聞きやしたまひつらんとといみじく恥づかし。  
あやしくかうばしく匂ふ風の吹きつるを、思ひがけぬほど  
なれば、おどろかさりける心おそさよと、心もまどひて恥  
ぢおはさうず。  
(141頁)

という大君の反省が記されていることに注目したい。そういえば妙に「かうばし」い香りがした時に、それを薫の芳香だと気付かなかつた自分の迂闊さを反省しているわけである。これによって大君の嗅覚が機能していたことがわかる（中の君のコメントは一切記されていない）。

この「かうばし」は、現在ではふっくら炊けたご飯とか焼きとうもろこしとか、食欲をそそるものに用いられている。しかしながら『源氏物語』にある二十六例は、すべて薫物の香りに限定されていて、食べ物に関する例はない。原則は焚きしめら

れた香だが、薫の「かうばし」だけは例外である。というのも薫の場合は体臭であって、決して焚きしめてなどいないからである。<sup>19)</sup>

その薫の芳香は宇治に到着する前の記述にも、

忍びてと用意したまへるに、隠れなき御匂ひぞ、風に従ひて、主知らぬ香とおどろく寝覚めの家々ありける。(136頁)

と、引歌を交えて滑稽なほどに強調されていた。薫はお忍びで出かけたのであるが、その身体から発せられる芳香が風で運ばれて、寝ている人まで驚いて目を覚ますというのだから、かなり誇張されている。「主知らぬ香」は、『古今集』の「主知らぬ香こそにはへれ秋の野に誰がぬぎかけし藤袴ぞも」(二四一番)を踏まえた引歌である。

薫の身体からは確かに異常な芳香が発せられていた。柏木巻で誕生した時には、芳香についての記述はなかったが、匂宮巻になると強烈な芳香が付与されている。その匂いは遠くまで漂うので(遠達性)、たとえ薫の姿が見えなくても、香りによって薫が近くにいることがわかるのである。だから薫は最も垣間見ができてにくい人ということになる。宇治の姉妹が油断していなければ、そして「かうばし」い香りにもっと敏感だったら、

薫から垣間見られずに済んだかもしれない。

ところが面白いことに、その薫が宇治十帖で四度も垣間見をしているのである。一度目と二度目は宇治の姉妹だった。三度目は浮舟、そして四度目は女の宮である。なんと薫は宇治十帖のヒロインすべてを一人で垣間見していることになる。それが薫の主人公性を保証しているわけだが、そうなるで大君の反省は次の垣間見に役立たなかったことになる。というのも大君は姉妹の合奏を聞かれたかもしれないと疑ってはいるものの、まさか垣間見られたとは思ってもいないからである。

ついにながら「源氏物語絵巻」を見ると、絵は透垣によって左右に分断されているように見える。右が垣間見る薫で、左が宇治の姉妹である。ここで右から中央にうっすらと描かれている霞に注目していただきたい。もともと霞は本文とは無縁の周囲をぼかす絵の技法であるが、ここでは薫から宇治の姉妹の方に向かってまっすぐに霞が伸びているように見える。そこで三谷邦明氏は『源氏物語絵巻の謎を読み解く』<sup>20)</sup>で、これを薫の芳香が姉妹にまで漂っていることを暗示していると解釈しておられる。なるほどそれも見えるが、それは薫の心の表出でもあらう。



垣間見は「奥の方より「人おはす」と告げきこゆる人やあらん、簾おろしてみな入りぬ」(140頁)と簾が降るされたことで終了した。「ありつる簾の前に歩み出でてつゝいるたまふ」(141頁)薫の応対に出たのは弁の尼だった。垣間見は見る側と見られる側が入れ替わることも可能である。ここで弁は逆に薫を、几帳のそばより見れば、曙のやうやうものの色分かるるに、げにやつしたまへると見ゆる狩衣姿のいと濡れしめりたるほど、うたてこの世のほかの匂ひにやと、あやしきまで薫り満ちたり。(144頁)

と垣間見ている(薫は見られていることを承知の上である)。ここは内から外であるし、月ではなく曙光であるから、薫の垣間見よりもはっきりと見えているはずである。それにもかかわらず、視覚的な美ではなく香りの方に筆が割かれているのはやや奇異な感じがする。弁の尼であるから、柏木との比較がなされてもおかしくないはずだからである。あるいは描かれずともそれと察しているのであろうか。

## 五

薫の香りはこれで解決したわけではない。薫は透垣の元に案

内してくれた宿直人が「いと寒げに、いららぎたる顔」(150頁)をしているのを見て、

濡れたる御衣どもは、みなこの人に脱ぎかけたまひて、取りに遣はしたる御直衣に奉りかへつ。(同頁)

と、褒美として着ていた狩衣を気前よく与え、自らは取り寄せた直衣に着替えている。どうも薫の芳香は水分を含むとその強さを増すようで、この時も夜霧に濡れることで芳香がより強まっていたのであろう。脱いだ衣装をそっくりプレゼントするのだから、宿直人は思いがけない豪華な褒美に預かったわけである(宿直人を味方している)。

なお薫はもともと「狩衣」を着用していたのだが、国宝絵巻ではなんと直衣姿で垣間見しており、ここにも絵巻の独自性が表出していることになる。これに関しても直衣に着替えた時間と、垣間見の時間が画中で重ねられているというプラスの解釈もされているが、月の形の違いを含めてマイナスの解釈も否定できまい。もちろんそれはあくまで絵に対する評価であって、決して『源氏物語』を批判しているわけではない。

普通だったらこれで一件落着くのだが、これには後日談がついていた。

宿直人、かの御脱ぎ棄ての艶えんにのみじき狩の御衣ども、えならぬ白き綾の御衣のなよなよといひ知らず匂へるをうつし着て、身を、はた、えかへぬものなれば、似つかはしからぬ袖の香を人ごとに咎められ、めでらるるなむ、なかなかところせかりける。心にまかせて身をやすくもふるまはれず、いとむくつけきまで人のおどろく匂ひを失ひてばやと思へど、ところせき人の御移り香にて、えも濯すすぎ棄てぬぞ、あまりなるや。

(152頁)

「移り香」は『源氏物語』の全十五例中三分の二の十例が宇治十帖に使われており、やはり宇治十帖のキーワードと考えられている。<sup>④</sup>しかも薫の八例を筆頭に匂宮(三例)・源氏(二例)と三人の男性に限定的に用いられているのである。つまり『源氏物語』では女性の移り香は問題にされておらず、むしろ男性の移り香が女性に付着・感染することが重要なのである。<sup>⑤</sup>

ここは薫の移り香に染みた衣装からあまりにもいい香りがするものだから、それを貰って着た宿直人が、会う人ごとに咎められたり褒められたりして、窮屈な思いをすることが滑稽に記されている。薫の芳香は残香性も異常に強いようである。ただしこの香りが薫の移り香だとわかる人はここにいそうもない。

どうも薫の香りは強烈な割には個性というか独自性が薄いようである。

これなどかなり戯画的な展開であるが、しかし必ずしも身分不相応故の顛末というだけではあるまい。薫の衣装を纏ったこの宿直人は、実は薫の分身(パロディ)としても読めるからである。要するに薫の日常もこの宿直人の繰り返しだったことがここから察せられる。

## 六

以上、橋姫巻の垣間見を詳細に分析してきた。まずその時間が暁方という特殊な時間帯であることを確認した。その上で視覚的に、有明の月と夜霧が動的に垣間見の効果をあげていることを明らかにした。聴覚の役割としては、遠くから聞こえてきた琴の音が薫を姫君の元へ誘っていること、垣間見場面では姫君の会話が薫の興味を惹いていることを明らかにした。さらに嗅覚の役割として、垣間見ている薫の香りが姫君達のところまで香っており、それに気付けば垣間見は未然に防げたことを論じた。

薫の身から発せられる「かうばしい」芳香は、プラスにもマ

イナスにも作用している。薫はその香りが存在証明になっているので、こっそり垣間見ることもできにくい人物だった。しかも宿直人は、薫の衣装を纏っただけで薫の分身になれることも明らかにした。

その薫が最も垣間見る人物となっているのであるから、必然的に垣間見られる側の嗅覚能力が試されていることになる。その意味では、宇治十帖のヒロイン達は案外鼻が効かないことになる。また薫の香りについても、具体的にどのようによいのかは説明されていない。だからこそ匂宮との香り競争あるいは匂宮の薫模倣が、宇治十帖の物語展開の重要な要素となりうるのであろう。

〔注〕

- (1) 吉海「『垣間見』る薫」『垣間見る源氏物語』（笠間書院）平成二十年七月
- (2) このことは平成二十年九月十四日に卯立の工芸館（越前市）で開催された記念講演会で、『源氏物語』若紫巻の「雀」を「読む」と題して講演した。
- (3) 姫君達の演奏に関しては、僧都が冷泉院に八の宮のことを語った際に、「この姫君たちの琴弾き合はせて遊びたまへる、

『源氏物語』橋姫巻の垣間見を読む

川波に競ひて聞こえはべるは、いとおもしろく、極楽思ひやらればべるや」（橋姫巻四頁）と知らされていたのであるから、これまで封印（延引）されていたことになる。

(4) 例えば至文堂の『源氏物語の鑑賞と基礎知識④橋姫巻』では、『岷江入楚』に「簾を高く捲たるなるべしまきのこしたる上の方の短きなるべし」が正しい解釈であろう（四頁）と記されている。国宝絵巻の詞書には「すだれすこしまきあげて」とあり、やはり低い方の解釈を取っている。

(5) 「萎えはむ」は『源氏物語』の全用例九例中七例が宇治十帖に、しかもそのうちの三例が橋姫巻に集中しているので、キーワードと見たい。その他「萎ゆ」八例、「うち萎ゆ」一例がある。「なえらか」は「なよよか」に近接したもので、『枕草子』に五例、『蜻蛉日記』に一例見られる。

(6) 余談だが、宇治の源氏物語ミュージアムの展示でも、コンピュータ制御によって月を映しだしたり隠したりしているが、その動きに気がつく人は少ない。

(7) 清水婦久子氏『源氏物語語本の研究』（和泉書院）平成十五年三月参照。

(8) 吉海「手まさぐり」攷『源氏物語の新考察——人物と表現の虚実——』（おうふう）平成十五年十月

(9) 上坂信男氏「小野の務・宇治の務」『源氏物語——その心象序説——』（笠間書院）昭和四十九年五月

- (10) 吉海「かうばし」考『垣間見る源氏物語』(立間書院)
- (11) 三谷邦明氏『源氏物語絵巻の謎を読み解く』(角川選書) 平成十年十二月
- (12) 帰京後も「宿直人が寒げにてさまよひしなどはれに思しやりて、大きな袷破子やうのものあまたせさせたまふ」(151頁)と薫は宿直人に食べ物を届けている。これは単なる同情や親切心ではなく、宿直人を懐柔して味方に付けようとしているのであろう。
- (13) この薫の芳香について助川幸逸郎氏は、愛欲に関わるとその体臭がより強烈になると言われている(薫の「かをり」をめぐって)『中古文学論攷』三・平成四年十二月。この場面から薫の愛欲を読み取るのは困難だが、逆に芳香の高まりから薫の内なる性的興奮状態を読むことは可能かもしれない。
- (14) 三田村雅子氏「方法としての〈香〉——移り香の字治十帖——」『源氏物語感覚の論理』(有精堂) 平成八年三月、吉海「移り香」と夕顔『源氏物語の新考察——人物と表現の虚実——』(おうふう) 平成十五年十月参照。
- (15) 薫の香りが感覚することについては、平成二十年十一月八日に行われた日本文学風土学会で「嗅覚の『源氏物語』——感覚する薫の香り——」という題で講演し、日本文学風土学会紀事33(平成二十一年三月)に掲載した。